第十四回　酒屋万来文楽　《白鷹禄水苑開苑 20 周年記念》

勧進帳

令和 3 年 11 月 27 日（土）
会場　白鷹禄水苑 宮水ホール
午後 3 時開演

全国有数の「酒どころ」であると同時に、文楽の源流「傀儡師」発祥の地としても知られる西宮造り酒屋において身近に文楽にふれていただこうという「酒屋万来文楽」。吉田文雀さんにご尽力いただき、2008 年にスタートしてから 14 回目となる今回は、10 月 23 日開催の《酒都で聴く居囃子の会》で取り上げた「安宅」に続き、歌舞伎十八番でもおなじみの「勧進帳」を上演しました。

能『安宅』が、弁慶と富樫に加え、義経や強力、太刀持ち、そして数の多さで圧倒する郎党達など、それぞれの場面に見せ場や謡の聴かせどころが配され、富樫に対しても集団の力で対抗しているのに対し、『勧進帳』はまさに弁慶と富樫の両者による、力と力の対決に焦点が当てられているといえます。一般に、歌舞伎や文楽の「勧進帳」では、富樫が武士の情けで一行を見逃したとされていますが、今回、和生師が遣う富樫を間近に拝見することによって、両者のギリギリの対決の中、義経とわかっていながらも見逃そうと、わが身を賭して決断するに至る微妙な心の内を、より深い共感をもってご覧いただけたのではないかと思います。本公演では、この弁慶と富樫の二人に焦点を当て、錣太夫と呂勢太夫という、いずれも現在、切場語りも担う太夫お二人による、緊迫感あふれる弁慶・富樫の対決をお聴きいただきました。

文楽公演に続く後半では、人形の吉田和生さん、玉佳さんにご登場いただき、観客の中から有志に弁慶、富樫の人形を持っていただいたり、また観客の質問にお答えいただくかたちで、演者自ら、演じる上での苦労や、演目にまつわる興味深いエピソードをお聞きしました。玉佳さんは今回弁慶の主遣いが初演だったといことで、お稽古と舞台での感覚の違いや、ペース配分の難しさについて、また和生さんが、弁慶と富樫の関係において、能と文楽では解釈が異なるなど、語られているのが印象的でした。

現代の日常生活とはかけ離れた世界を、聞きなれない言葉で語る古典芸能を鑑賞し、理解するには、どうしてもその背景となった歴史や、あらすじなどの予備知識が必要となります。ましてや、それをかつての観客のように、エンターテイメントとして楽しむには敷居が高く感じられるのは事実です。ただ、演者の息遣いも感じられるほどの身近でその熱演に触れることで、そのエネルギーがダイレクトに伝わり、理屈を超えた共感を得ることができるのではないかと思います。今回観客の中には、文楽鑑賞が初めての方も数名おられ、本日の公演が、今後の今に生きる伝統芸能にふれるきっかけになればと考えます。

出演者

浄瑠璃　　竹本綴太夫
　　　　　豊竹呂勢太夫
三味線　　鶴澤藤蔵
　　　　　鶴澤清志郎
人形
富樫　　　吉田和生（人間国宝）
弁慶　　　吉田玉佳
義経　　　吉田玉翔
　　　　　吉田玉勢
　　　　　　吉田玉彦
　　　　　　桐竹勘介
　　　　　　吉田玉路
　　　　　　吉田和馬
　　　　　　吉田蓑之
　　　　　　吉田玉延
　　　　　　吉田和登

囃子　　　　望月太明吉
　　　　　　藤舎敦生

プログラム

第一部　　　文楽公演　　「勧進帳」
　　　　　　休憩　　ドリンクサービス
第二部　　吉田和生師に聞く　「文楽の手ほどき」